

2025 年 9 月 7 日 説教「求めよ、捜せ、たたけ」

ルカの福音書 11 章 5～13 節

11 章の冒頭は、弟子が祈りを教えていただきたいと言う願いに、「主の祈り」が教えられた部分を読みました。神を神とすることと、「赦し」について学びました。

1. 祈りについてのたとえ話 (5～7 節)

- ①真夜中に友人の所に (5)「**また、イエスはこう言われた。『あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、《君。パンを三つ貸してくれ》』**

イエス・キリストが祈りについてのたとえ話を始められました。その設定ですが、ある人に友達がいたということです。その人が、真夜中に友達の所に向かったのです。そして、どうやら戸をどんとたたいて、「友よ。パンを三つ貸してくれないか。」と願い求めたのです。およそ、遠慮などはありません。自分の家には切らしてしまったパンを貸してくれと言うのです。

- ②出してやるものがない (6)「**『友人が旅の途中、私のうちに來たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。』**

友人への要求は続きます。彼の友人が、旅の途中に立ち寄ったのだが、何も出してあげるものがないのだ、と。こんなことは言ったかどうかはわかりませんが、お腹を空かせているようなので、少しでも食べさせてあげたいのだよ。頼むからパンを三つかしてくれ。

- ③断る友人 (7)「**『すると、彼は家の中からこうこう答えます。《めんどろをかけないでくれ。もう戸締りもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることは出来ない。》』**

しかし、その要望を受けた友人は家の中から答えたのです。この夜中になんということだ。非常識ではないか。どうか面倒なことは言わないでくれ。戸締りもしたし、家族も皆寝ているのだ。今、わざわざ起きて、何かを君のためにしてあげることはいできないよ、と。

2. 願いもとめれば伝わる (17～20 節)

- ①頼み続ける (8)「**あなたがたに言いますが、彼は友だちからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう」**

たとえ話は終わっているのですが、イエスはその話に付け加えをするようにして言われました。その人はいくら友人からの頼みであったとしても、夜中にわざわざ起きることはないとしても、その友人が執拗に頼み続けるとするなら、床から起き上がって、その友人が必要としている物を与えることになるでしょう、と。文語体「求めの切なるにより」という訳は響いてきます。

- ②求めよ、与えられる (9)「**わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」**

9 節はたとえ話からの結論と言っても良いでしょう。「求めよ。さらば与え

られん。尋ねよ。さらば見いださん。門を叩け。さらば開かれん。」(文語訳)。
祈りの大原則の一つです。」

③ 捜す者は見つけ (10) 「だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」

9 節と内容はほとんど同じです。違うところがあるとすれば、「だれであっても」とあるところです。求めること、捜すこと、たたくことに躊躇している者があり、その人が自分には資格がないと感じているとするならば、それは間違いで、「だれであっても」求める者は受けるのですとされているのです。

3. 天の父なる神の慈悲 (11～13 節)

① 魚と蛇 (11) 「あなたがたの子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるのでしょうか。」

ここからは求め、捜し、たたく者に応えて下さる方について、たとえをもって教えられます。父親と子どもの関係にたとえられます。子どもが父親に魚を下さいと要望したとするのです。そのような場合に、父親のなかで、その子に毒を持っていることもある蛇を与える者がいるのでしょうかと、反語のようにして尋ねられるのです。そんな父親はいないでしょう、と確かめているのです。つまり、求め、捜し、叩いている者の祈りを聞いて下さる方は、子に対する父のように、必死で真実の祈りを真剣に受け止めて下さる、慈愛に富んだ方であることが示されています。

② 卵とさそり (12) 「卵をくださいというのに、だれが、さそりを与えるでしょう。」

もう一つのたとえ話をもって、応えてくださる方について教えられます。誰かが卵をくださいとお願いする場合に、それに応える人は何を与えるか、まさかさそりを与えはしないでしょう、というのです。さそりは当時のパレスチナ地域にあっても、その猛毒の針を刺して人をも死に至らしめる節足動物として恐れられていました。

③ 聖霊を下さる天の父 (13) 「してみると、あなたがたも、悪い者であっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊をくださらないことがありましょう。」

ここには、自分が、たとえ悪い者であっても、子どもであるゆえに良い物を与える親になぞらえて、父なる神の慈愛が伝えられています。それが神を慕う者であろうとなかろうと、求める者には良い物を与えられるということでしょう。「天の父は、悪い人にも良い人にお太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」(マタイ 5:45) という御言葉にもあるように、一般恩寵として、恵みを注がれる神のことが示されている通りです。しかし、もし主なる神を信じて求めるならば、神はその人に対して、聖霊を送ってくださらないはずがないとお教えくださるのです。

《結論》「求めなさい。捜しなさい。門をたたきなさい。」。「そうすれば、与えられる。見つかる。開かれる。」というのが、この聖書箇所テーマであります。そのために、イエスは友人の家にパンを借りに行ったたとえ話をされたのです。ところで、求めて、与えられるには条件があるのでしょうか。というのも、「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもほしいものをもとめなさい。そうすればかなえられます。」(ヨハネ 15:7) とか「何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。」(ヨハネ 16:24) とか、「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いをきいてくださる」(Ⅰヨハネ 5:14) といった御言葉は「求め」の条件のように読めるからです。ところが、ここにはただ、「求めなさい」とあり、さらには「だれであっても、求める者は受け…」(ルカ 11:9, 10) とあり、条件はつけていません。どういうことでしょうか。そこで考えておきたいことは、ルカの福音書で「求めなさい。」とされているのは、誰に求めよとされているのでしょうか。言うまでもありません。父なる神に求めよ、捜せ、たたけ、とされているのです。それも、これらの言葉の言語は「求め続けよ、捜し続けよ、たたき続けよ」なのです。神への信仰がなければとても求め続けることはできないでしょう。だからこそ、主イエスはたとえ話の中で、非常識とも思える執拗な求めの例をあげておられるのです。そこでお伝えします。どなたでも、全知全能の神に求め続けてください。応えられます。主を起こすほどの熱さをもって、主に求めていきましょう。さがしましょう。門をたたきましょう。

このたとえ話は「走れメロス」(太宰治)にあるような友情物語ではありません。求める人に対応する友は父なる神です。読みだした時は友情心が乏しい人のように理解してしやすいです。しかし、このたとえ話のなかに示された父なる神は、すぐには応えてくれませんが、求める友人が懸命に求める様子を認めて、応じています。求める人の信仰を確かめているのです。父なる神は二番目と三番のたとえにおいては、求める子が魚を求めるなら蛇ではなく魚をくださり、求める人が卵を求める時にさそりではなく卵を与えてくださるというのです。ここに、慈愛深き神のお心を読み取ることができます。そして、最後のお言葉では、熱心に求める者には聖霊をくださるとあります。聖霊は、「あなたがたにすべてのことを教えてくださる」「平安を与える」(ヨハネ 14:26, 27)、「真理に導き」「キリストの栄光を表す」(同 16:13, 14) とあります。また、聖霊は私たちの見たことも、聞いたこともなく、思いつきもしなかったすばらしいことを備えてくださるのです(Ⅰコリント 2:9)。求め、捜し、叩くの究極的な答えは、聖霊をいただくことです。すばらしい恵みであり、祝福です。私達は求めてもなかなか得られずがっかりすることもありましょう。しかし、熱心に求める者には、聖霊の恵みとともに、具体的な答えもくださるのです。求め、捜し、たたき続けましょう。